

2024年 11月10日 会報162号	<h1>かわち野に吹く風</h1>	東大阪文化財を学ぶ会 会 長 南 光 弘
------------------------	-------------------	-------------------------

## 第7回 12月6日(金) 紅葉の秋 摂津池田を訪ねる

1. 集合時間 午前9時20分(時間厳守) 受付9時～ ※9時32分発のバスに乗車
2. 集合場所 阪急宝塚線池田駅改札を出てバス停付近 ※何かあれば 090-83759655へ
3. 費用 拝観料300円(久安寺)
4. 昼食 池田駅周辺の食堂を各自利用
5. 行程 (全行程約7km)

池田駅、(路線バス)⇒バス停「中橋」→伊居太神社→(大広寺・池田氏の菩提寺)→池田城本丸跡→池田市立歴史民俗資料館→鉢塚古墳(五社神社)→池田駅周辺(昼食)→呉服神社→池田駅⇒(路線バス13時53分発)⇒紅葉の久安寺・楼門⇒(路線バス15時58分発)⇒池田駅 解散予定16時20分頃

### 〈解題〉渡来文化と伊居太(いけだ)神社、呉服神社の成立

池田の人々に最も親しまれ崇敬されてきた伊居太神社・秦上社(はたかみしゃ)、呉服神社・秦下社であるが、機織り技術を日本に伝えた4人の縫工女のうち、穴織媛(綾羽)、呉織媛をなせ、中央の伝承である縫工女伝承が、池田にもたらされたのであろうか。

(1) もともと池田は、渡来系氏族秦氏の拠点の1つで、今も秦野、畑の地名が残っている。北側に茨木市あたりまで連なる五月山連山の一つは「秦山」と呼ばれていた。この秦地域には、上円下方の鉢塚古墳(京都太秦の蛇塚古墳に似ている)、双円墳の二子塚古墳(東大阪の山畑古墳群の一つ瓢箪山古墳に似ている)など特殊な後期型古墳が存在し、渡来系文化の痕跡をとどめると考えられている。

この秦氏は、五月山西端の展望の良い地に、自らの神祠として秦の社を斎(いつき)いており、これが穴織社(現伊居太神社)の始まりと考えられ、神主の河村氏は長らく秦姓を名乗り、文政7年(1824)の河村安芸守秦定正、また、穴織宮神主采女正秦定直などの史料の記録が残っている。なお、現在の宮司さんはその第86代目という。

(2) また、阿知使主に始まる渡来系の東漢氏(やまとあやうじ)に連なる坂上氏(さかのうえし)の一族坂上正任(まさとう・別名土師太郎)が、平安時代中期に土着し、自らが開発領主となった池田の地を「呉庭(くれは)」と名付けた。その子孫正友が、長寛3年(1165)、後白河法皇の法華堂に荘園として寄進し呉庭庄と呼ばれた。斯うして、中央の伝承である阿知使主と縫工女の伝承が池田にもたらされたと考えられる。

中世の呉庭庄は、鎌倉初期に土師正季(まさすえ)が呉庭荘の繁栄の為に総社として天王社を建て、牛頭天王、阿知使主と都加使主、穴織、呉織を祀り、自ら神主となって祭政一致の支配を行った。この天王社が呉服神社の起源と考えられる。

(3) 室町時代中期には領主の系統が絶え、呉庭の地の西にある能勢の内藤氏が、陣営強化のために血縁の池田氏(播磨姫路城の池田輝政は分家筋が出自)を美濃から呼び、呉庭に築城させたことから情勢は一変し、この時に地名も「池田」に変わった。この時の国人領主池田氏が、この地の先住者のために、既存の二つの神社をこの地の産土神として祭祀したと考えられる。つまり、坂上氏の祭祀する織姫伝承に二神を分けて、秦上社に穴織を、秦下社に呉織を祀った。

ここに、現在の穴織社と呉服社の成立を見ることが出来る。そして、「イケダ」の地名から、河辺郡にあった『延喜式』式内社の伊居太神社が衰勢していたのに乗じて、二社のうちでより古い秦上社を「伊居太神社」と勝手に名付けたと考えられる。

#### ① 式内社、伊居太(いけだ)神社

祭神は、応神天皇・仁徳天皇・穴織(あやはとり)媛。祭神の穴織大明神については、約900m南にある呉服神社の呉織(服)(くれはとり・祭神は仁徳天皇、呉織媛)大明神とともに、多くの伝承が残されている。

『日本書紀』によると、「応神天皇37年、阿知使主(あちおみ)らを呉(ご)に派遣して縫工女(きぬぬいめ)を求めた。阿知使主は、4年後、兄媛(えひめ)・弟媛(おとひめ)・呉織媛・穴織媛の4人の工女を伴って帰国し

筑紫の宗像の神に兄媛を献じ、ほかの3人を連れて、住吉津・武庫津に戻ってきたが、天皇は亡くなっていた。そこで天皇の第4皇子の大鷦鷯尊（おおさざきのみこと）に献上した」とある。

応神天皇の頃、中国の呉国から機織縫製の技術を持つ呉服（くれは）と穴織（あやはとり）という姉妹が渡来し、布帛を織り続けてその技術を日本に伝え、そのおかげで衣服が全国に広まった。姉妹の死後、呉服は呉服神社に、穴織は伊居太神社に祀られ、呉服という言葉の由来にもなった神として現在に至るまで信仰されてきた。

## ② 呉服（くれは）神社



祭神は仁徳天皇・呉織（服）大明神。もともと秦下社と称され、さらに呉服社・呉服大明神と称し明治時代初期の神仏分離以後、今の社名となった。

室町時代、池田氏により創建され、戦国時代の兵乱で焼失したが、慶長9年（1604）、豊臣秀頼により再建された。祭神の呉織大明神は、伊居太神社の穴織媛とともに、来日した呉の国の縫工女の呉織媛である。

境内に入ると、本殿の南に姫室塚がある。箕面有馬電気軌道（現、阪急電鉄）が開通するまで、姫室と梅室の2つの塚がこの辺りにあったが、工事の際、姫室塚は呉服神社へ、梅室塚は伊居太神社に移された。縫工女を葬ったものといわれるが、中世の経塚と考えられる。呉服神社周辺の室町という地名も、この姫室塚・梅室塚から付けられた。

この辺りの室町住宅地は、阪急電鉄の創業者小林一三が、日本で初めて開発した郊外分譲住宅地である。

## ③ 池田城本丸跡

文保3年（1319）、国人領主池田教依（のりより）によって築かれてたといわれ、五月山の南麓の東西に延びる尾根を利用した標高50mの高台に位置している。西側には崖、北側には杉ヶ谷川を取り入れ、東西約330m・南北約550mの中世城郭で東、南には堀（最大幅で25.7m、深さ6.5mという大規模なもの）と土塁を配置し防御効果を高めていた。畿内でも屈指の規模を誇った城郭として知られている。

※城山勤労者センターに池田城の復元模型がある。

池田氏の出自については不明な点が多く、年代の判明する史料の初見は、貞治3年（1364）の池田親政である。室町時代中期には、摂津国守護細川氏の代官として勢力を強め、高利貸も行ってた。池田充政（充正）は、奈良春日大社所有の桜井郷を入質させ、大田庄も公卿・学者として著名な一条兼良から購入している。

文明元年（1469）、充政のとき、応仁の乱（1467～77年）で西軍大内氏の攻撃により池田城は陥落するが、大内軍が去ったため、充政は城を奪回した。しかし、充政の子の貞正のとき、細川氏の内紛で細川澄元方についたため、細川高国に攻められ、永正5年（1508）に池田城は再び陥落した。この戦いの最中に、高国方へ寝返った池田正盛が城主となったが、1519年、池田城を脱出していた貞正の子の久宗が城を奪い返した。この後も細川氏の内紛に翻弄され、池田長正のとき、三好長慶の下に屈従を余儀なくされた。

永禄11年（1568）、織田信長の上洛により、摂津攻めが始まった。三好三人衆は戦わずして逃亡し、降伏しなかったのは、池田勝正の守る池田城のみとなった。信長の池田城攻撃に、池田氏は激しく抵抗するが、城下に火を放たれたため、ついに勝正も降伏した。池田城の発掘調査で、このときの火災の跡が確認された。

池田氏の家臣で、三好方の池田二十一人衆の荒木村重は、勝正を追放し、弟の知正を城主とした。元龜2年（1571）、信長の命により、細川藤孝が池田城を攻撃してきた。村重はこの攻撃に耐えたが、2年後には信長の家臣になり、摂津守に任じられ、池田氏もその支配下に入った。村重は、池田城を、三の丸を備えた近世城郭として整備したが、伊丹氏を倒し有岡城（現、兵庫県伊丹市）を築くと、天正2年（1574）、池田城は破却された。その後1579年、村重の謀反で有岡城が陥落すると、池田は豊臣秀吉の領地となった。



#### ④ 塩増山大広寺

室町時代中期、応仁の乱（1467～77年）で細川勝元の家臣だった池田充政（充正）が創建したもので、本堂左手にある墓地には、かつて池田氏累代の墓が並んでいたが、今は2基を残すのみである。最上段の西側に最後の城主池田知正、知正の甥で養子になった池田三九郎の墓場が並ぶ。ともに五輪塔で、それぞれの法号が刻まれている。

充政は、寺の裏手の五月山に望海亭を設けた。大広寺の祥山禅師が、五山文学僧の横川（おうかわ）景三禅師に依頼して書かれた580字の書が『望海亭記』でこの地が文人墨客の来遊する景勝地であったことを示している。望海亭跡には、天保12年（1841）に池田の国学者で、歌人でもあった山川正宣（まさのぶ）が建てた碑が残っている。本堂前方には、牡丹花隠君遺愛碑が立っている。文化元年（1804）、池田の儒学者田中桐江（とうこう）が、室町時代に当寺に住んだ歌人牡丹花肖柏（しょうはく）の風流韻事を慕って建てたものである。肖柏は和歌を飛鳥井宗雅に、連歌を宗祇（そうぎ）に学んだ。宗祇とともにしばしば摂津の諸将と連歌の興行をもち、池田正盛の庇護を受け、大広寺内の泉福院に隠棲し、風流を楽しみ、夢庵（むあん）と号する草庵を結んだ。

肖柏が夢庵でつくった「笹の葉の音も便りの霜夜かな」の句がある。永正15年（1518）、戦乱の池田から堺（現、堺市）に移ったが、池田在住中、正盛以下、正能・長正・正郷・正棟らに和歌・連歌を教えた。

#### ⑤ 池田市立歴史民俗資料館、娛三堂古墳出土品（展示）

1980年に開館した歴史民俗資料館は、近世の文芸・学問・古文書をはじめとする歴史・考古・美術工芸・民俗など多岐にわたる資料を保有しており、また、それらの収集・調査や展示公開もしている。

代表的な所蔵資料としては、猪名川流域の古墳時代前期を代表する遺物である池田茶臼山古墳出土資料や娛三堂古墳出土資料、池田城跡出土資料等がある。

前期古墳の娛三堂古墳（4世紀後半）は、直径約30m・高さ約5mの円墳で、明治30年（1897）に竪穴式石室から半円方格帯放射（はんえんほうかくたいほうしゃ）式神獸鏡1面、碧玉製石釧1個、碧玉製管玉4個、鉄斧4本、直刀6本、小刀2本、鉄器1個が出土した。

池田茶臼山古墳は、4世紀中頃の築造と考えられている。墳丘長59.5m、墳形は前方部が発達しない「柄鏡式」の前方後円墳。盗掘されており、赤色顔料が塗られた竪穴式石室から脚付椀形土師器1点、碧玉製石釧1点、碧玉製管玉6点、ガラス玉、鉄製品が発掘当時出土している。

#### ⑥ 呉春醸造元（蔵見学なし）

池田の町には、江戸中期には銘醸地として、最盛期には38軒の酒蔵があったが、呉春は呉服の里に現存する最期の池田酒醸造元となっている。江戸期には猪名川の水を仕込み水として使い、「丹醸酒」を醸した伊丹と並んで江戸下り酒（江戸積み酒）の銘醸地としての地位を確立していた。しかし、灘に宮水が発見され、より辛口酒を醸すことの出来る灘の酒に、その江戸下り酒（江戸積み酒）の銘醸地としての地位を譲ることとなった。

呉春は、五月山伏流水を仕込み水として使用してきたが、近年水脈が枯竭（こけつ）気味という。

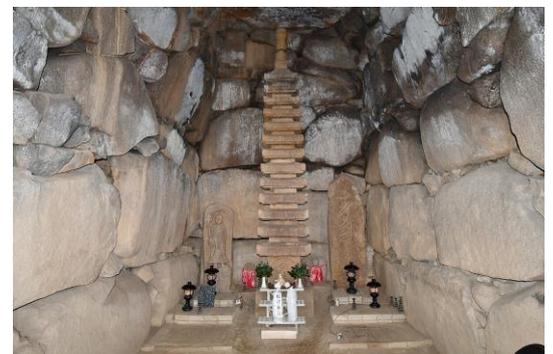
#### ⑦ 鉢塚古墳（五社神社）

鉢塚古墳は、古墳時代後期の1辺が約40mの上円下方墳で、全長約14m・玄室の長さ約6.5m・高さ約5mの日本屈指の規模をもつ横穴式石室がある。北側には幅約3mの周濠が残っている。

玄室内には、鎌倉時代の石造十三重塔（国重文）があり、左右に不動明王をあらわす板碑と石造地藏菩薩像を安置している。上円部からは、1964年、鎌倉時代の経塚が発掘された。

鉢塚古墳は、五社神社が管理している。経塚出土遺物（府文化）も、五社神社が所蔵している。

五社神社の約100m南の一乗院（真言宗）は多羅山と号し、行基開創の寺伝がある。本尊の木造聖観音立像と木造多聞天立像は、平安時代後期の作で檜の一木造、木造春日竜神立像・木造雨宝童子立像は、室町時代の作と考えられている。



⑧ 高野山真言宗の寺院 大澤山久安寺

神亀2年(725)に、聖武天皇の勅願で行基により開創、天長年間(824~834)に、弘法大師空海により再興されたと伝えられ、真言密教の道場安養院を前身とする。

久安元年(1145)、近衛天皇の勅願により祈願所として再興され、大安寺と号した。豊臣秀吉も参拝し、月見茶会が催された。現存する最古の建物は楼門で、室町時代初期に再建され、その後、江戸時代と明治時代に3~4回修理された。間口3間(約5.4m)・奥行2間(約3.6m)、和様・唐様の折衷様式で、前面開放の仏堂形式、入母屋造・瓦葺きの高度な技術で建てられている。

本尊の千手観音像は秘仏である。このほか、平安時代末期の特徴を示す、サクラの一木造の阿弥陀如来坐像(国重文)などがある。境内はよく整備され、紅葉の季節はとくに美しい。



《お知らせ》

- ・歴史文化講座開催 11月30日(土) 13時30分~ 商大谷岡記念館 多目的室  
テーマ 「桃山」にみる「美」とは ~戦国武将が愛した「茶器」の謎~  
講師 津田 廣行(「津田塾」主宰)
- ・歴史探訪 河内湖・淵・池と人々の暮らし  
日時 1月18日(土) 集合 9時 JR徳庵駅  
行程 観音禅寺、稲田八幡宮、川俣神社、西堤神社(鱗殿)、大通寺、西岸地藏、清水地藏、長栄寺(雲竜図)、鴨高田神社など、近鉄河内永和駅  
※ 終了後 布施あたりで懇親会の予定。追ってお知らせいたします。 お楽しみに